Bulletin of the Nanzan Centre for European Studies Vol. 6 pp. 37-44

フランシスコ・ザビエルの宣教の背後にある神学思想

青山　玄

450年前に聖フランシスコ・ザビエルが日本にもたらしたキリスト教信仰には，古来あの世に対して大きな関心を示し祖先崇拝の伝統を大切にしていた日本人にとって魅力的な来世信仰と共に，日本人には受け入れ難い，異教徒の救いについて極度に悲観的な神学思想が含まれていた。ここでは，キリシタン布教の成功と失敗に深く関連している，その来世信仰と異教徒観について考察してみたい。

1　聖母・諸天使・諸聖人と悪魔の働きについての生きている信仰

現代にはあの世の霊界に対する霊魂の感覚を軽視し，天使・悪魔の存在や働きを迷信として意図的に無視しようとしている人が少なくないが，カトリック教会内にこのような風潮が広まったのには，1970年代に入って聖書学者たちが広めた，天使や悪魔についての信仰が聖書にあるような形で神の民に導入され受け継がれたのは，バビロン捕囚の頃からであるとの研究による所が大きいようである。この研究それ自体は真に結構なもので受容すべきであるが，だから天使や悪魔についての信仰は神よりのものではなく，異教徒の民間に定着していた迷信でしかないと主張するなら，そこにこそ聖書の教えに悖(もと)る重大な論理の飛躍があるのではなかろうか。聖書によると，全人類は血縁的にも一体をなしており，次第に増えて地に満ち，地を従わせる使命を神から与えられていて（創，1：28），善人にも悪人にも太陽を昇らせ恵みの雨を降らせる神から愛されているからである。アブラハムが神から特別の恵みを受けたのも，「世界のすべての民は彼によって祝福に入る」（創，18：18）という言葉から察すると，異教徒を救いから除外するものではなく，神は実際に神の民イスラエル以外の民の中でも，その救いと発展のために働いている。例えばアモス書には，「私はイスラエルをエジプトの地から，ペリシテ人をカフトルから，アラム人をキルから導き上ったではないか」（アモス，9：7）とあるが，他にも異教徒の間での神の働きを立証している個所は，旧約聖書にも新約聖書にも数多く読まれる。したがって，聖書の民が天使や悪魔についての信仰を異教文化から受容したとしても，そこには神の摂理の導きが働いており，

それは正統信仰の異教化であるよりも，異教文化のキリスト教化であると考えてよいのではなかろうか。四福音書の描く神の子キリストも，異教徒の中での神の働きを是認し，霊界・天使・悪魔などについても度々語っているからである。また同じ信仰に根ざして生き，神からの内的な vector（動径）に対する霊魂の感覚を実践的に磨いていた旧約の預言者たちをはじめ，キリスト以後の無数の聖賢たちも，現存する史料から察せられる限りでは，数多くの体験に基づいて霊界の存在も天使・悪魔の働きも確信していたように思われる。私たちの考察するザビエルも，この同じ伝統的信仰に根ざして宣教しており，その信仰を体験的に深めてもいる。

危険や不安の大きい時代であったので，ザビエルは聖母・諸天使・諸聖人の保護を頻繁に願ったり，それについて語ったりしており，度々奇跡的事象を体験して，あの世の現存と働きとを日々身近な現実と痛感しながら生きていたが，キリスト教国からの軍事的保護を全く受けずに，ゴアから 1300 レグア(7280 キロ以上)も離れていて「イスラム教徒もユダヤ人もいない」と聞く，従って宇宙の創造神を全く知らない異教徒たちだけの国で宣教するという，それまで体験したことのない企画に踏み出すには，さすがのザビエルも大きな不安を覚えたことであろう。聖人から意見を求められたイエズス会員やポルトガル商人の中でも，反対する人々が少なくなかったであろう。しかし，1549 年 1 月 14 日付のイグナチオ宛ての書簡では，ザビエルは神の保護に対する大胆な信頼によって既にその不安に打ち勝ち，あの世からの助けにむしろ大きな慰めさえも感じてもいたようで，次のように書いている。

> 「大風，大暴風雨，暗礁，たくさんの海賊などによって死の危険がさし迫るこの航海をすることに，内心どれ程大きな慰めを感じているかを書き尽くすことは決してできません。四隻の船のうちで二隻がどうにか救われれば，たいへんな幸運だと言われている程です。今まで一度も出会ったことのない大きな危険に遭うことが確かであるとしても，私たちの聖なる信仰をかの地に大いに広めるために，主なる神への大きな希望を抱いておりますから，心のうちの様々な思いを考え合わせて〔決意し〕，私は日本へ行くことをやめません。」[1)]

古来この世からあの世に移った祖先や友人・知人に対する心の感覚を大切にし磨いて来ている日本人に宣教するには，霊界の動きに対する先鋭な感覚を保持し，絶えず霊界と共に生きているザビエルのような聖人は，全く打って付けの宣教師であろう。ザビエルが当時の日本人の尊敬に満ちた注目の的になったのも，理解するに難くない。

聖書の理解についてはザビエル時代の信仰者よりも遙かに多くの学術的知識に恵まれている現代のキリスト者たちの信仰が，その外的知識の豊かさの故に深みと力を失い，形骸化していることを反省すると，体験に根ざしたザビエルの信仰にもっと実践的に学ぶべきではなかろうか。といっても，父なる神に祈り従おうとする実践的心よりも，自分で知ることを先にする者は，いつまでも霊界からの働きを体験的に知るこ

とができないであろう。人間の分析的理性は事物現象の周囲を廻るだけで，そこに宿っている神よりの力を心で体得することができないからである。スポーツ選手が日々のたゆまぬ実践によってその技能を磨き体得するように，芸術も宗教も，日々のたゆまぬ実践により心のセンスで悟るべきものなのではなかろうか。聖書にも「神の国は言葉のうちにではなく，むしろ能力のうちにあるのだから」（コリント第1，4：20）という言葉や，その他これに類する言葉が多く読まれるからである。ザビエル書簡に躍動している，霊界の力に導かれ守られ支えられて生活し働く精神を，我々も身につけたいものである。

ザビエルは，たとえ受洗者がまだ教理理解に不足していても，自分たちを愛して下さる神の働きや配慮を信じて，それに従って生きようとする心さえ正しく表明されるなら，後事を神に委ねて大胆に洗礼を授けていた。1545年1月の書簡48によると，ザビエルはこのようにしてインドのトラバンコール海岸で，一か月に1万人以上の人に洗礼を授けており，同じ書簡の5には，

「この地方はたいそうよく準備されているので，今年中に10万人以上の人が信者になるであろうと，主なる神において信じている。」[2)]

とも書いている。日本においてもこの大胆な布教法は基本的に変えておらず，シュールハンマー師の試算によると，2年余りの滞日中に900人余に授洗している。これも，あの世の力が実際に信じる者，祈る者の上に働いてくれるという，生き生きとした来世信仰に日々実践的に生きていたからであろう。

2　ザビエルを困らせた日本人の質問とザビエルの背後にある神学思想

周知のように，今までに発見された異教徒の中で日本人よりも優れている人々は見付けられないであろう，などと日本人の能力を殊の外高く評価したザビエルは，山口で次のような質問を受けている。

「もしも神を礼拝しない人がすべて地獄へ行くということが本当ならば，神は日本人の祖先たちに慈悲心を持っていなかったことになります。祖先たちに神についての知識を与えず，彼らが地獄に行くに任せていたからです。」[3)]

ザビエルはこれに対して，最初の人間たちに与えられた神の教えは人の心に刻み込まれているので，人々は他の誰からも教えられなくても，神の掟を知っており，何が善で何が悪かを心得ていて，悪いことをしたら良心の責め苦を感じている，などと巧みに言い逃れ，日本人の疑念を晴らしたかのように書き送っているが，勿論そんな答弁で，知識欲の旺盛であった当時の日本人がそれ以上は質問しなくなったとは思われない。事実ザビエルはまた別の時に，山口のキリシタンたちから次のような質問を受けたことを報告している。

「私たちが，地獄に落ちた人は救いようがないと言うと，彼らは大変深く悲しみます。亡くなった父や母，妻，子，そして他の人たちへの愛情のために，彼らに対する敬虔な心情から深い悲しみを感じるのです。多くの人は死者のために涙を流し，布施とか祈禱とかで救うことはできないのか，と私に尋ねます。私は，彼らを助ける方法は何もないのだと答えます。彼らは，このことについて悲嘆にくれますが，私は，それを悲しんでいるよりも，むしろ彼らが自分自身〔の内心生活〕に怠ることなく気を配って，祖先たちと共に苦しみの罰を受けないようにすべきだと思っています。彼らは，神はなぜ地獄にいる人を救うことができないのか，そしてなぜ地獄にいつまでもいなければならないのかと，私に尋ねます。私はこれらのすべてに十分に答えます。彼らは自分たちの祖先が救われないと分かると，泣くのをやめません。私もまた，〔地獄へ落ちた人に〕救いがないことで涙を流している親愛な友人を見ると，悲しみの情をそそられます。」[4)]

昔の日本人の祖先に対する心情を思い遣ると，誠に涙を禁じ得ない話であるが，異邦人の救いについては，「東からも西からも大勢の人が来て，天の国でアブラハム，イサク，ヤコブと共に宴会の席に着く」（マタイ 8：11）というキリストの言葉があるのに，いったい何処からこのような悲観的思想が生じたのであろう。15 世紀末から 17 世紀前半にかけてイベリア半島の神学界を風靡した，異教徒の救いに極度に悲観的なこの思想は，16 世紀中葉のトレント公会議で激しい議論の末にルネサンス神学を抑えて優勢になってからは，そういう考えの人が多く要職に就いて一時的に教皇庁の決定にも大きな影響力を行使していた。

ザビエルが高く評価しているイグナチオの主著『霊操』は，第 2 週の始めに，黙想者たちに次のような準備の考察をさせている。即ち救い主キリストを知らず，洗礼を受けずにいる無数の不信仰者・教外者が，死ぬと皆永遠の地獄に落ちて行くのを，神がその玉座からどのような思いで眺めておられるか，またそのことを知らずに大きな盲目と悪魔の欺瞞の中で生活している全世界の無数の人々の人生が，どれ程絶望的であるかを，具体的に推測してしっかりと心に刻みつけること。イグナチオがこのような考察並びにこれに類する考察を，その『霊操』の中に繰り返し織り込んだのは，黙想者の心をそれによってキリストと共になす人類救済の業へと奮起させるためであったと思われるが，しかし，世界の終末接近を説く予言と同様，極度の危機感や悲観主義を伴う恐れのあるこのような思想はいわば一種の劇薬で，それを服用した宣教師の中に新しい目覚めや捨て身の奮起心などの特有の良い効力を発揮するかたわら，その歪んだ観点から生ずる異教文化や異教社会に対する種々の誤解や過度の対立という，好ましくない副作用を起こし易くするのではなかろうか。19 世紀以降に出版されたイグナチオの『霊操』に基づく黙想書には，異教徒の救いについてのこのような悲観的語句が削除されたり大きく緩和されたりしているが，16, 7 世紀に来日したイエズス会

員がすべて前述した『霊操』による修練を受けていたことを思うと，宣教師たちの善意は高く評価するとしても，わが国のキリシタン伝道に対するこの思想の影響は，軽視できないであろう[5]。

3　ザビエルの背後にある悲観的神学思想の修正

受洗せずに死んだ先祖を祈りや布施で救うことはできないのかという，山口キリシタンたちの質問には，前述した悲観的神学思想に汚染されていない神学者であったなら，次のように答えることができたであろう。

> 同様の問題はすでに古代からあり，408年頃の手紙102にはキリスト受肉以前の異教徒には救いはなかったとしたアウグスティヌスも，その20年後にはその見解を撤回しており，トマス・アクィナスもこの撤回やその他の引用に基づいて，受洗せずに死んだ異教徒にもキリスト者の祈りによって救いの恵みが与えられると説いている。ということは，異教徒であった日本人の祖先は神からの招きをはっきりと自覚して拒否したのでない限り，永遠に救われることのない地獄に落ちたのではなく，煉獄で神による救いを待っているのであり，キリシタンたちの祈りと功徳によっても煉獄から救われ得るのである[6]。

受洗せずに死んだ異教徒でも，もし親心ですべての人を愛しておられる宇宙の創造神の働きに感謝し従う心さえ保持しているなら，永遠の地獄に落とされることはないであろうし，またその魂が煉獄の火によって浄化されつつあるのなら，子孫やこの世の人々の祈りや功徳によっても助けられ救われるというのが，カトリック教会の伝統的神学思想であるから，前述したザビエルらの悲観的返答はこのように訂正すべきであろう。

異教徒の救いに悲観的なイベリア半島の神学思想は，17世紀中葉からフランスやイタリアのイエズス会員をはじめとする神学者たちが，アウグスティヌスの教説に基づいて原罪による人間性の堕落をあまりにも強調するヤンセニズムを，異端思想として論駁した時代的流れの中で，次第にその悲観主義を緩和したようである。しかし，ヤンセニズムはインノチェンツィウス10世の1653年5月31日付大勅書“Cum occasione”によって断罪されても，フランスの政財界に大きな影響力を保持するイエズス会員に対する心情的反発から，彼らが広めていた神に対する大胆な信頼と愛よりも，神に対する謙虚な畏れと規則厳守とを極度に重視する人々によって，信仰生活面でのヤンセニズムの流れは18世紀まで続き，1773年の一時的なイエズス会解散の一つの遠因にもなった。それで，異教徒の救いについての多少悲観的な見解は緩和されながらも，既に西欧で根づいているキリスト教形態の中での神に対する純粋な敬虔と忠誠を尊ぶ信徒と宣教師たちによって，20世紀中葉に至るまで根強く受け継がれて来た。

しかし，現代のキリスト者は，教会の現代化を目指して異教文化に大きく心を開いた第二ヴァチカン公会議（1962～65）の精神に従って，異教徒の救いに悲観的な，信仰生活面でのこのような偏狭な見解の修正に努めるべきであろう。この公会議はそのような見解を修正して次のように宣言しているからである。

「救い主はすべての人が救われることを望むのであるから，（中略）本人の側に落ち度がないままに，キリストの福音ならびにその教会を知らないが，誠実な心をもって神を探し求め，良心の命令を通して認められる神の意志を，恩恵の働きのもとに行動によって実践しようと努めている人々は，永遠の救いに達することができる。また本人の側に落ち度がないままに，まだ神をはっきりと認めていないが，神の恩恵に支えられて正しい生活をしようと努力している人々にも，神はその摂理に基づいて救いに必要な助けを拒むことはない。事実教会は，彼らのもとに見出されるよいもの，真実なものはすべて福音への準備であって，ついには生命を得るようにとすべての人を照らすかたから与えられたものと考えている。しかし，しばしば人々は悪魔に欺かれて，自分たちの考えの中にむなしく迷い，神の真理を偽りと置きかえて創造主よりも被造物に仕えたり，あるいは神なしにこの世に生きそして死んでゆくなど，絶望のきわみに曝されている。したがって神の栄光とこれらすべての人々の救いとを念ずる教会は，『全被造物に福音をのべ伝えよ』との主の命令を忘れることなく，布教活動を励まし支えるよう熱心に努力するのである。」[7)]

この引用文の後半に読まれる言葉からも明らかなように，異教徒も神による救いから除外されていないからと言って，キリストのもたらした福音を宣教する必要がないというのではない。ザビエルの神学思想の修正は，キリスト教信仰を日本社会にも受容され易くするためであって，第二ヴァチカン公会議は，全人類に対する福音宣教を神より教会に与えられた重大な使命であり義務であると自覚して，次のように述べていることを忘れてはならない。

「すべての人と諸国民とに神の愛をあらわし伝えるためにキリストから派遣された教会は，自分がこれから尚果てしない宣教活動を行わなければならないことを知っている。（中略）教会が救いの秘義と神からもたらされた生命とをすべての人に提供しうるためには，キリスト自身がその受肉によって周囲の人々の特定の社会的，文化的状況に自身を合わせたのと同じ熱意をもって，これらすべての社会の中に浸透しなければならない。」[8)]

「とは言え教会は，現世的国家の政治に介入することは毛頭考えていない。また神の助けのもとに愛と忠実な奉仕によって人々に仕えること以外には，他のいかなる権威も要求するものではない。キリストの弟子たちは，自分の生活と働きにおいて人々と緊密に結ばれつつ，キリストを公然と告げることができない場所に

おいても，人々に真の証しを立て，人々の救いのために働くことを望む。」[9)]

日本を含む多くの国々で，すでに高度の異教文化や異教的伝統の根づいている社会に布教することの難しさを数多く体験して来たカトリック教会が，ここで「浸透」という表現を使っていることは，注目に値する。キリストの話に登場する「パン種」や「地の塩」などの譬えからも知られるように，教会は全世界の様々な民族・文化の社会または国家の中でその民族に陰に陽に伴って働く使命を神から戴いているが，教会が相異なる文化の中に生きている諸民族の心に点火すべきキリスト教信仰の火は，人間の造る文化や国家などとは次元を異にする，言わば「神よりの火」である。

ザビエルが来日した16世紀頃のカトリック教会では，このことがまだ十分に深く自覚されていなかったために，中南米の異教文化圏に既にキリスト教化している西欧文化を強いて広めようとして無数の文化財を破却したり，日本では国家権力と対立して迫害されたりした。その後，特に技術文明の急速な発達により国際化が大きく進展した20世紀には，文化と文化の対立問題は一面においては緩和されて共存ムードが高まってはいるが，他面現代の状況を伝統的民族文化存亡の危機と受け止めて，外的豊かさと便利さを優先する画一的な国際化に抵抗する動きも強まっている。このような世界的状況の中で宣教するには，今一度キリスト教信仰の超文化性に対する自覚を深める必要があるのではなかろうか。もし仮に西欧文化に受け継がれて来たキリスト教信仰の火を「青白い火」と称することが許されるなら，その火を東洋文化に点火することはできるが，火の色は大きく異なり，オレンジ色か赤色の火になるかも知れない。こうして国際色豊かな様々な色の火が天に向かって燃え上がり，神に賛美と感謝の祈りを捧げるのを，神は望んでおられるのではなかろうか。

この観点から，日本人の伝統的文化の中でまずキリスト教化すべきものは何かと振り返る時，それは，近年の技術文明によって大きく弱められつつもなお根強く続いている来世信仰であるように思われる。16世紀にはスペイン・ポルトガルの歪んだ神学思想のため，ザビエルは日本人の心底に脈々と続いている来世信仰に点火しても，その火を大きく燃え広げることはできなかったが，あの世の神や諸天使・諸聖人の導きや助けを日々生き生きと痛感していたザビエルの信仰の火は，今なら妨げを受けずに，多くの日本人の心に点火することができるのではなかろうか。激動する現代文化の潮流に翻弄され，安心して頼ることのできるものを求めている今の日本人の心に，ザビエルの持って来たような，何者にも屈しない強い来世信仰の火を点火する宣教師の出現と活躍を祈って止まない。

註

1）書簡第71，no. 7，10. 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』，平凡社1985年，pp.

351～353.

2）書簡第 48, no. 5. 前掲書 p. 193.

3）書簡第 96, no. 23. 前掲書 p. 533.

4）書簡第 96, no. 48,49. 前掲書 p. 543.

5）拙稿「16,7 世紀と明治前期のカトリック布教の特徴」参照, 1984 年 6 月,『キリシタン文化研究会会報』所収。

6）創文社『トマス・アクィナス神学大全』第 2 冊, pp. 277～281；第 25 冊, pp. 45～62 も参照。

7）第二ヴァチカン公会議『教会憲章』第 16 番。

8）第二ヴァチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』第 10 番。

9）前掲教令, 第 12 番。